板鼻城遺跡二次調査報告書

１９８８

群馬県安中市教育委員会

序

安中市板鼻地区は高崎市に隣接し、地理的条件もよいことから、大規模な住宅団地が造成されるなど、近年宅地化が急速に進んでまいりました。また、板鼻地区は史跡の多いところでもあります。

板鼻城はこの地区における最大の遺跡であり、広大な部分が城域となっております。そして、この範囲内にも住宅が造られるようになりました。そこで、こうした開発に対応し、文化財を保護するために調査を行なうことになりました。

板鼻城は戦国時代の特色を良く残している城でありますが、その構造については不明な部分がたくさんあります。今回の調査により、その一端を知ることができました。

調査にあたりましては、地権者をはじめ地元の皆様にはご協力いただきました。厚くお礼申し上げます。また、この場を借りて調査に従事された作業員の方々の労をねぎらいたいと思います。

昭和63年12月

安中市教育委員会

教育長　多　胡　純　策

例　　言

1　本書は個人住宅用地造成（土地所有者小木恵里子）に伴う板鼻城遺跡２次調査報告書である。

2　調査は昭和63年度文化財保護国庫補助金、県費補助金を受けて、安中市教育委員会が実施した。

3　発掘調査は昭和63年６月17日から７月１日までの間実施した。遺物整理は昭和63年８月１日から12月17日までの間実施した。

4　調査主体は安中市教育委員会であり、調査は社会教育課社会教育係大工原豊、千田茂雄（調査員）が担当し、松本豊がこれを補佐した。

5　本書の執筆及び編集は大工原が行なった。

6　調査組織は下記のとおりである。

社会教育課長	茂木勝文	主事（社教主事）	田中秀雄
社会教育係長	反町良一	主事	大工原豊（担当）
主査	松本　豊	調査員	千田茂雄（担当）
主任（社教主事）	森泉寿義雄		

目　　次

本文目次

序
例　言
目　次
Ⅰ　調査の方法と経過……1
Ⅱ　遺跡の位置……1
Ⅲ　検出された遺構……4
Ⅳ　小　結……~~4~~ 5

挿図目次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　調査区位置図……2
第３図　調査区全体図……3
第４図　土壙・ピット実測図……4

図版目次

図版―１
~~図版―２~~

I　調査の方法と経過

安中市板鼻地区は近年急速に住宅化が進み、板鼻城の城域内にも住宅が建設されつつある。こうした中で、板鼻城西第３郭内に個人住宅（土地所有者小木恵里子）が建設されることになった。そこで、文化庁の補助金を受けて住宅建設部分について発掘調査を行ない、記録保存の措置を講ずることになった。発掘作業は昭和63年６月17日から７月１日まで実施し、整理作業はその後12月17日までの間断続的に実施した。

調査は、調査対象区内にトレンチを設定し、遺構の有無についての確認を行なった。１トレンチは２×12.5m、２トレンチは２×11.5mとし、道路に直行する方向に、６mの間隔で設定した。トレンチの位置は１トレンチが４Ｋ―110から４Ｎ―109グリッド、２トレンチは４Ｋ―110から４Ｎ―111グリッドである。

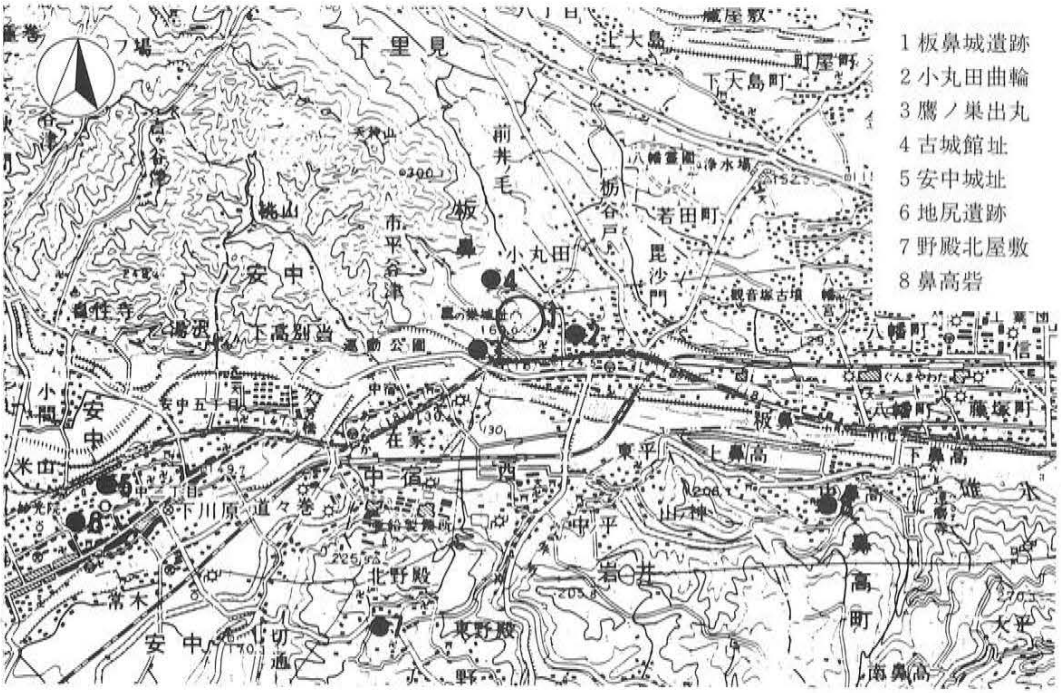
遺構確認面はⅣ層からＶ層であり、バックホーによりこの面まで掘削し、その後、作業員により遺構確認作業を行なった。確認された遺構については精査を行ない、写真撮影、平面図、土層断面図を作成した。現場作業終了後はバックホーにより埋め戻しを行なった。

調査終了後は整理作業を行なった。

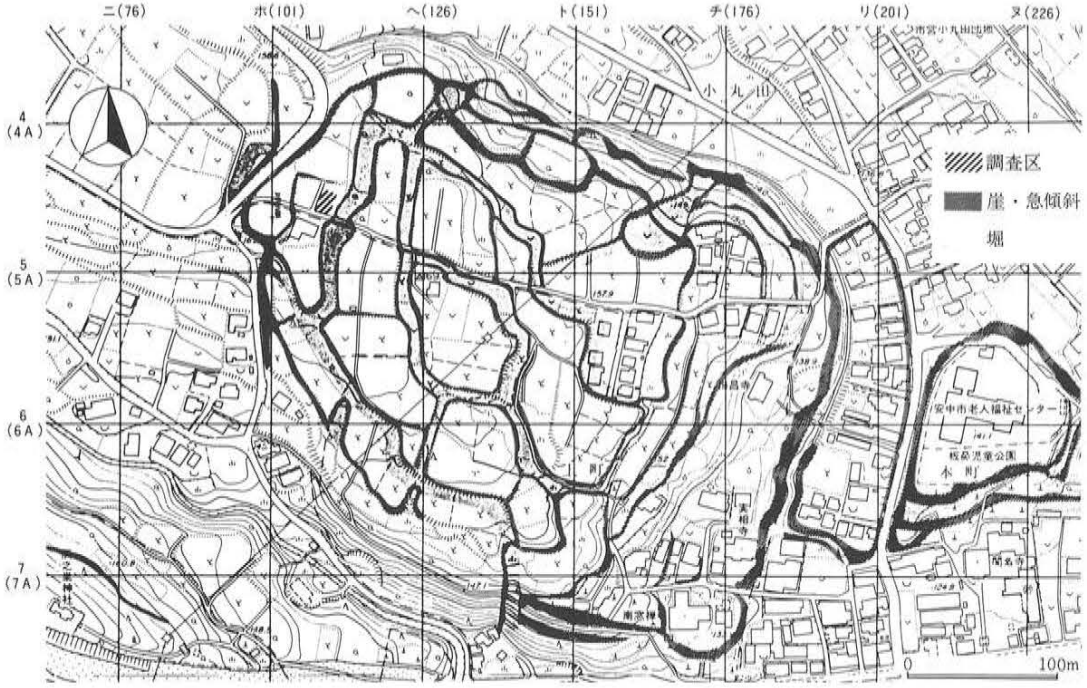
II　遺 跡 の 位 置

板鼻城は安中市板鼻字小丸田、上町、古城、菅沢地内に存在する。碓氷川と九十九川合流点の下流約１kmの北岸台地上に位置する。天神山（322.9m）から南東へ延びる舌状台地の先端にあたる。城址の南西には蟹沢川が流れ、その対岸には鷹巣出丸が存在する。また、北から東にかけては道場川が流れ、北には古城館址、東には小丸田曲輪がある（第１図）。

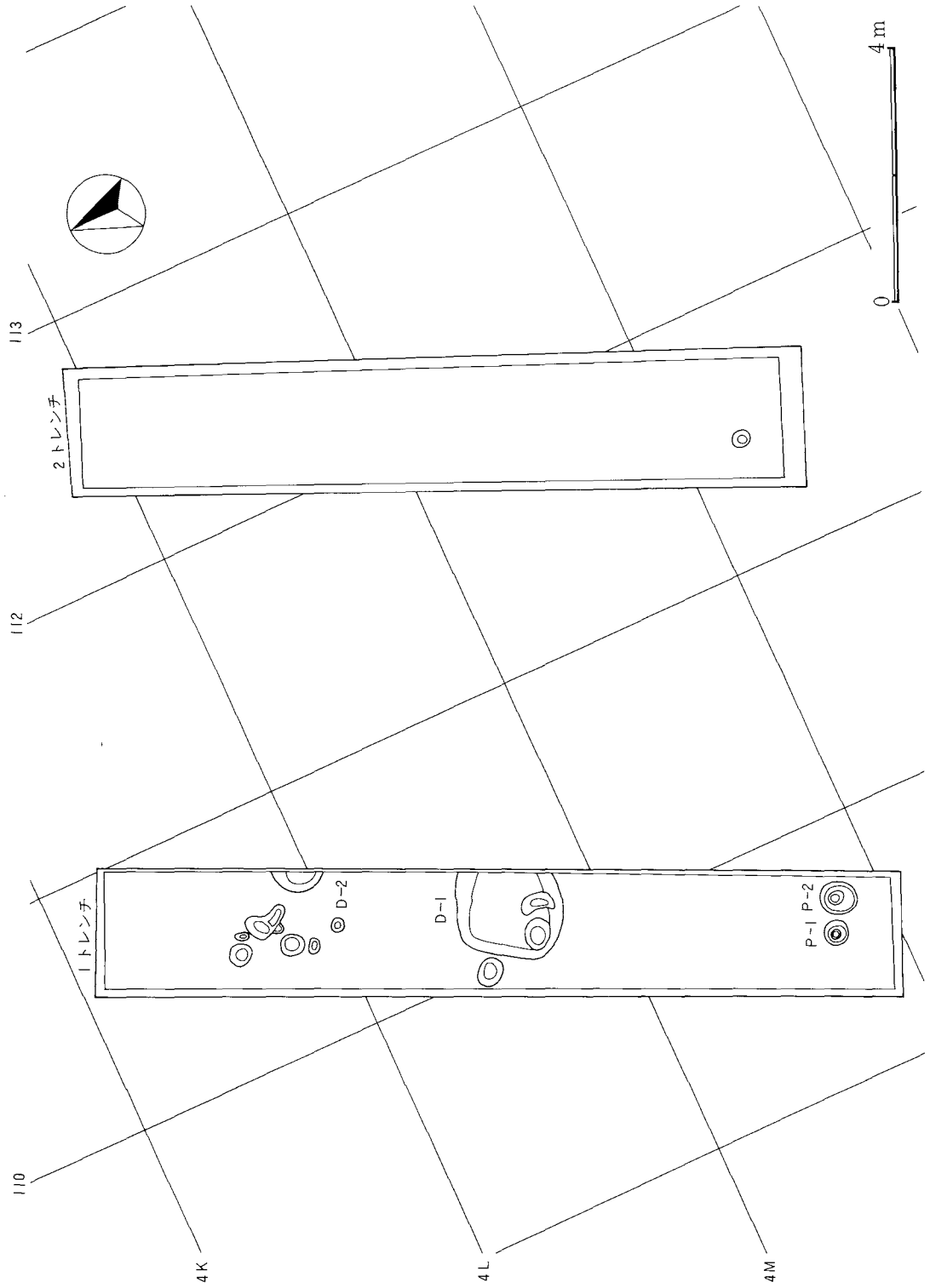
板鼻城は「螺旋濠式」という特殊な形態の城であり、前回の調査や古城館址の調査によっておもに戦国時代（15～16世紀）に使用された城で、それ以前にもなんらかの目的で使用されていた場所であることが判明している。今回の調査区域は前回の調査区のＣ区の北側に隣接する西第３郭内にあたる（第２図）。調査区の東側を堀（Ｍ―６号堀）が南北に走る。現状は平坦であり、北側に緩やかに傾斜している。前回の調査で西第３郭では堀（Ｍ―８号堀）とこれに付随する基礎工事の遺構が検出されているが、今次の調査区の南側では遺構はほとんど検出されていない。



第1図　遺跡位置図(1：50,000)



第2図　調査区位置図(1：2,500)



第3図　調査区全体図(1：100)

Ⅲ　検出された遺構（第３図・第４図）

１トレンチから検出された遺構としては、土壙２基とピット10基がある。

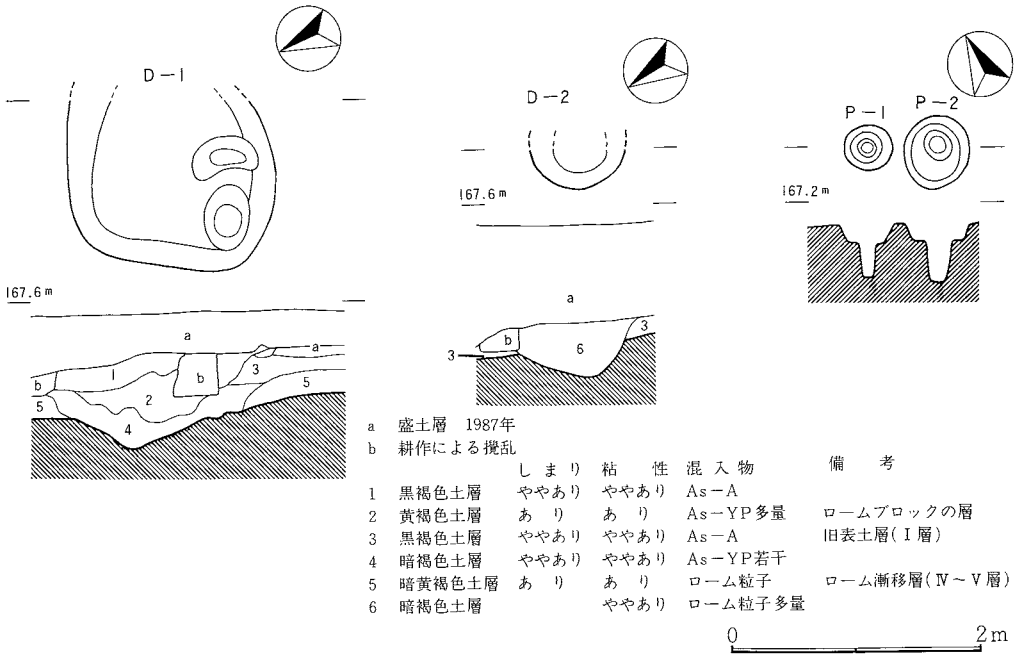
Ｄ－１号土壙は直径約３ｍの不正円形を呈する。南側にはピット２基がある。覆土上層（２層）にはロームが大量に入り込んでいる。掘り込み面はＩ層直下であり、中世から近世にかけての遺構と推定されるが、遺物は検出されなかった。

Ｄ－２号土壙は直径0.8mの円形を呈する。掘り込み面はＩ層以下とみられ、覆土中にはＡｓ－Ａを混入していない。覆土はＤ－１号土壙の４層と類似している。

Ｐ－１、２号ピットは２段の掘り込みを持ち、並んで存在している。何らかの目的を有する遺構と考えられるが、はっきりしない。ほかにＤ－２号土壙周辺に多数まとまるが性格は不明である。

２トレンチからはピットが１基検出されたのみである。

遺物は今回の調査ではまったく検出されなかった。



a　盛土層　1987年
b　耕作による撹乱

		しまり	粘性	混入物	備考
1	黒褐色土層	ややあり	ややあり	As－A	
2	黄褐色土層	あり	あり	As－YP多量	ロームブロックの層
3	黒褐色土層	ややあり	ややあり	As－A	旧表土層（Ｉ層）
4	暗褐色土層	ややあり	ややあり	As－YP若干	
5	暗黄褐色土層	あり	あり	ローム粒子	ローム漸移層（Ⅳ～Ⅴ層）
6	暗褐色土層		ややあり	ローム粒子多量	

0　2m

第４図　土壙、ピット実測図

Ⅳ　小　結

今回の調査は西第3郭の平坦部分について実施した。こうした平坦部分にどの程度構造物が存在したかについて、これまで不明な部分が多かった。板鼻城の場合、前回、今回の2次にわたる調査で西第3郭には構造物が少なかったことが判明した。しかし、前回の調査で西第2郭には、柵列及び溝状遺構が検出されており、部分部分で遺構に疎密があることがわかる。また、古城館址においても遺構の疎密があることから、城館址の平坦部分について、今後も留意してゆく必要がある。

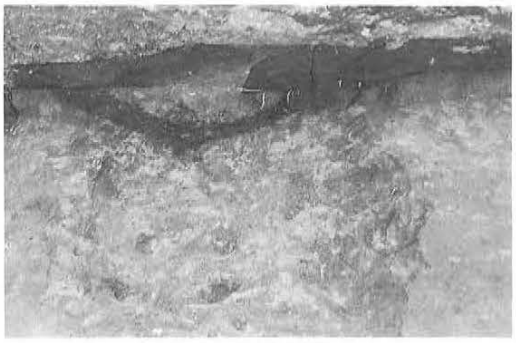
また、城址においては遺物が少ない傾向があるが、今回の調査においても調査面積が小さいせいもあり、まったく遺物が検出されていない。こうした状況が城館址の研究を遅滞させる要因となっていると言えよう。

図版-1

板鼻城遺跡二次調査地点遠景
（北西方向より望む）

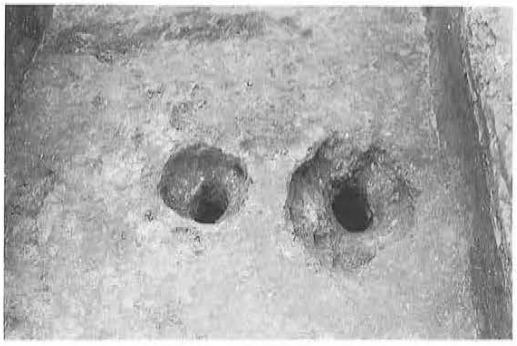
1トレンチ（北より）

2トレンチ全景（北より）



D-1号土壙

D-2号土壙



P-1・2号ピット

調査参加者

金井武司　下マス江　神宮幸四郎　鈴木八郎　高木公太郎　田中利策

板鼻城遺跡二次調査報告書

発　行　日　　昭和63年12月28日
編集・発行　　安中市教育委員会
印　　刷　　朝日印刷工業株式会社